

生存科学研究ニュース

VOL. 10. NO. 6

1995. 11. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518

第1回「生存の理法」研究会

平成7年9月14日(木)午後2時より生存科学研究所会議室において標記の研究会が開催された。

この研究会は、生存科学研究所の理事会・評議員会・顧問団・基金の4者が個性を持ちながらコーディネートして武見思想を具現化しようという基本構想の一環で、今年度すでに発足している「生存科学基礎論」研究会と対になる。基礎論研究会が、どちらかというところこれまでの研究を踏まえてその成果を「生存」に集約しようとする方向で取り組むのに対して、この理法研究会は、旧来の学問や制度などの枠をはずして自由に考えることにより新しい発想を得て、生存科学が発生してくる根っことなる、かつ実践につながる理論を掘り当てようと試みるものである。

第1回は(財)実験動物中央研究所所長野村達次氏(生存研評議員)が話題を提供し、ついで参加者による質疑応答、意見開陳が行われた。

野村氏は、武見先生が書かれているように「生存の理法」のマクロ秩序とミクロ秩序のミクロは分子生物学につながると理解し、武見先生のご示唆を受けて実験動物を作ることに分子生物学を導入した。そして長年の努力の末、今日やっと、遺

伝子を鼠の卵にいれて人間の病気を発現できるところに、それも医薬品の品質管理などへの利用等、社会的、工業的需要に応えられる量産体制で到達できたことを武見先生にご報告したいと武見先生に感謝の意を表してから、まず、ビデオによって分子生物学の胚操作を披露した。

ついで、人間の病気の解明のためには、人間と同じ病態が起きる実験動物が必要であること、上記の技術を利用して人間の病態の解明に役立てることを思い立ったいきさつ等を述べ、つい最近この技術で、本来人と猿にしか感染・発病しないポリオを、ポリオビールスに対するレセプターを持たせることでマウスに発病させ得たことを報告した。

その他、胸腺が無く免疫不全状態のヌードマウスには人間の癌が移植できること、発癌性テストや癌の抗癌薬への感受性を調べることへの利用の可能性、実験動物の保持のための受精卵の冷凍保存とその移植の成功等についても説明し、最後に、生存のミクロのアプローチとは遺伝子から病気をみる路ではなかろうかと結んだ。

発表後の質疑応答では、遺伝子操作の諸問題、突然変異と人工的変異、自然と人為、倫理と教育、個の始まり、文明化と文化他、広い範囲の自

論された。

**第3回 「生存科学基礎論」研究会
「ヘルスエコノミックスについてー
健康価値論と経済価値論の融合は可能かー」**

10月26日(木)午後3時30分より研究所会議室において第3回「生存科学基礎論」研究会が開催され、早稲田大学社会科学部教授田村貞雄氏(生存研常務理事)が標記のテーマで発表を行った。

田村氏は、まず武見太郎先生の包括医療観の紹介から始まり、それと自分との出会い、大分市医師会の医師会立アルメイダ病院と医師会の活動と自分の出会い、そこから得られた経験と理論を披露した。ついで、氏が「世界経済評論」1982年12月号に発表した資本主義経済の動態的变化とネオキャピタリズムの流れ、大分地域におけるヘルスエコノミックスの展開、EU(ヨーロッパ連合)の展開とネオキャピタリズム、共存の経済システムのグローバル戦略、東西間、世代間、市場・非市場間の共存とネオキャピタリズム等を逐次説明した。

その要点は、個人・家庭・企業・政府が健康価値論の実践によりそれぞれの役割を果たしながら地域主権中央制御のグローバルシステムを形成するという、ヘルスエコノミックスの視点より共存の経済システムとそれのグローバル戦略を提示した。ネオキャピタリズムは人間生理から見た健康価値論と人間が本性として持っている経済価値との融合を図るシステムとして、実学であるヘルスエコノミックスに対応する社会・政治・経済体制の実態として、我々が発想したものである、というものである。

発表後出席者から、人間中心という時の人間と

は何か、ヒトか、DNAか、価値とは何かそれをまず明確にする必要がある、等の質疑や、ネオキャピタリズムというネーミングは誤解を招きやすく良くない、ネーミングを変えたら良いのではないか、生存経済学といっても良いのではないか、というような提案がなされ、活発な討議が行われた(「生存科学基礎論」研究会の詳細も逐次雑誌『生存科学』に掲載される予定である)。

**平成7年度第2回
「公益信託武見記念生存科学研究基金」
運営委員会 武見賞受賞者選考委員会**

10月16日(月)午後2時より研究所会議室において板垣運営委員長を座長として標記の委員会が開催され、今年度の武見記念賞・武見奨励賞の受賞者が選考され、卜部文麿、真柳誠の両氏が武見奨励賞受賞者と決定された。

卜部氏は、武見太郎先生の依頼による「バイオエシックス」の執筆、グローバルバイオエシックスの研究、土屋健三郎氏と協力し、生存研内にバイオサナトロジー学会を設立して活動を推進、精神科医として患者と長年同居してのケアの実践他多くの社会的実践活動を行っていること等を評価されて受賞。

真柳氏は、東アジアにおける医学・医療の相互伝播を実証的に解明することに尽力、生存研の研究にも参加して伝統医学存続の背景と意義を研究、中国医学文献を日本や中国で復刻、普及させる等の実践活動を評価された受賞。

授賞式は12月16日(土)研究所で行われる予定。

由な発想の討議が行われ、まとめとして中村元氏（生存研評議員）から、専門の違う人達の話合いとディスカッションは、人間の問題として考える時非常に広い領域に触れ、画一した見解に到達しないが、深い意義がある、本日の議論を雑誌等に発表して多くの方に見て頂くようにと発言があった（本研究会の詳細は近い将来雑誌『生存科学』に掲載される予定である）。

第2回「生存科学基礎論」研究会
「産業生態科学について
—産業医科大学と武見太郎先生」

9月21日(木)午後3時半より、研究所会議室において第2回生存科学基礎論研究会が開催され、前産業医科大学学長土屋健三郎氏（生存研副理事長）が標記のテーマで発表を行った。

土屋氏は、まずスライドを使用しながら産業医学と産業医の歴史について説明を行った。奈良の大仏を作る時の水銀中毒の話から始まり、ヨーロッパでの鉛中毒、煙突掃除人の陰囊癌の話をし、産業革命後の職業病の多発と、病気と職業の関係を指摘し、自ら町の工場に入って病人の治療にも当たったイタリアのR. Ramazziniを産業医学の創始者として紹介、また、それから100年ほど遅れてイギリスやアメリカで産業医として活動した医師を紹介し、明治時代の日本の紡績工場と肺結核、炭坑と塵肺の関係等を説明した。

ついで、「産業医科大学における教育の特色—産業医学の発展を目指して—」他、事前ならびに当日配布した種々の資料を参照しながら、産業活動が労働者の健康に影響を与えるだけでなく住民の健康にも影響を与えるという事態に至るために、産業生態科学が必要であると主張した。

日本では、昭和47年（1972年）労働安全衛生法が施行され、1000人以上の従業員を雇用する企業は1名以上の産業医を選任する義務を課せられ、ここに初めて「産業医」が制度として登場する（それまでは「医師である衛生管理者」であった）が、産業医になろうとする医師がほとんどいなかったため、労働省は産業医を養成する大学を設置しようと考え、それを武見先生に依頼し、こうして産業医学マインドを持つ医学生を作る医学部として産業医科大学が誕生した。

産業医学はイギリスでは Occupational Medicine、アメリカでは Occupational Health である。日本でも労働衛生、産業保健等いろいろに言われるが日本医師会で武見先生は産業医学に統一された。

武見先生の言う医療とは包括医療であり、そこでの医学とは保健、予防、治療、リハビリまでの広範囲にわたる医学の関わるすべての分野を含めた使い方をしている。武見先生の包括医療の具体的内容は、地域医療、産業医学、老人保健の3つよりなり、産業医学はその一環として生存科学の中に基礎を置くものである。

産業医学の中心は健康投資で、積極的な Health Promotion あるいは Health Development に重点を置いている。そこに人間の生きていく価値が生まれてくる。

自分は、産業医科大学の初代学長に就任してから、武見先生の思想を基本に、自分の経験と考え方を加味し、また Health Economics を加え、新しいタイプの医師を作るため産業生態科学研究所を設立した。

発表後の討議では、予測の医学の必要、医療人類学への接近の必要、行動科学との関係、企業の生産企画段階への産業医の参加の必要等が活発に議

第4回バイオサナトロジー学会総会並びに
フォーラムのお知らせ

平成7年11月30日(木)午後1時より、霞が関ビル33階東海大学校友会館にて第4回バイオサナトロジー学会が下記の要領で開催されます。

なお、参加費は3000円ですが、生存研の会員は無料で参加できます。

プログラム

午後1時より総会

午後1時30分よりフォーラム

総合司会 師岡孝次(バイオサナトロジー学会副会長)

1. 会長挨拶 土屋 健三郎
2. 生死の今日 山折 哲雄
3. 阪神大震災に見る自然と文明 ト部 文麿
4. 鼎談 自然災害と人工災害の中での生と死を語る

司会 土屋 健三郎

発言者 山折 哲雄・ト部 文麿・堂園 涼子

雑誌「生存科学」への投稿のお勧め

本年度から、生存研が発行してきた学術誌「生存科学」を、新しいスタイルのAタイプと従来の形式の研究を更に進めるためのBタイプの2つに増やして、両方を発行することとなり、すでにおとどけしましたように新しいAタイプが1回発行されています。

Aタイプは研究論文という形式にとらわれることなく、意見や主張を積極的に取り上げることで、より、より自由に生存科学の新しい考え方や理論を探るという目的を持っていますので、会員の

方々のご主張を発表して頂き、また多くの方々からそれに関わるご意見を頂いて一層ホットな創造的議論を深める良い機会を提供できると確信しております。

生存科学について、またはこれからの生存の問題について、従来からの形式での研究論文をご投稿頂くと共に、常日頃から皆様方の心の中にあるお考えをAタイプに奮ってご投稿くださることをお待ちしております(Aタイプの投稿規定は従来の論文形式より自由になります。お問い合わせは研究所まで)。

会員寄贈図書

人間化—考える心と詩的言語の誕生—

小嶋謙四郎 海鳴社

平成7年6月発行

ヘルスエコノミックス—激動の経済変革に対して

我々は何ができるか—

田村貞雄・杉田 肇 成文社

平成7年8月発行

研究所日報

9月11日(月) 21世紀の産業活動のあり方研究会

9月19日(火) 常務理事会

10月5日(木) 編集打ち合わせ会

10月9日(月) 21世紀の産業活動のあり方研究会

10月12日(木) 鹿児島プロジェクトに関して南隅
4町長との話し合い